

# カント「天才」概念発展史に関する一考察

## ——「精神 Geist」概念に注目して——

倉橋知佳子

### 1. はじめに

カントは『判断力批判』<sup>(1)</sup>(1790)において、独創的かつ範例的な作品を制作する芸術家である「天才 Genie」概念を導入する。「天才」概念は、カントにおいて様々な内実の変化を遂げながら20年にわたって「人間学講義」の中で取り扱われてきたが、一貫して取り上げられている天才の中心的な要素の1つに「精神 Geist」<sup>(2)</sup>がある。「精神」は『判断力批判』において「心において生き生きさせる原理」<sup>(3)</sup>とされ、また「美的理念 ästhetische<sup>(4)</sup> Idee を描出 Darstellung する能力」<sup>(5)</sup>と定義づけられるが、1770～80年代における未公刊著作をひも解くと、この概念の変化が「天才」概念発展史<sup>(6)</sup>におけるとりわけ重要な転換点をなしていると思われるのである。本論文は<sup>(7)</sup>、1770～80年代の「人間学講義録」やカントのレフレクシオン(手稿)、また『判断力批判』の分析によって、カント「天才」概念の発展過程において「精神」概念の位置づけがどのように変化したのか、またその背景にどのような「天才」概念に関する思考の深化があったのかを示すことを試みる。

### 2. 『判断力批判』における「精神」概念

「はじめに」では、「精神」が「美的理念を描出する能力」とであると述べた。この章では、「美的理念」を「描出する」とはいかなる事態なのか説明することにより、『判断力批判』における「精神」概念の役割を簡単に論じておきたい。

「美的理念」は『判断力批判』第49節において次のように定義されている。

美的理念のもとには私は、多くのことを考えさせるきっかけを与え、それに対していかなる思考、すなわち概念も等しくあることができず、したがっていかなる言語も完全には到達せず、理解可能なものにすることができないような構想力の表象を理解している<sup>(8)</sup>。

「美的理念」とは第一に「構想力の表象」である。カントにおいて、認識が成立するためには「概念 Begriff」とそれに対応する「直観 Anschauung」（＝構想力の表象）が与えられなければならない<sup>(9)</sup>。美的理念は過剰に多くのことを考えさせる構想力の表象であるために、いかなる1つの概念にも対応することができない。

この構想力の表象の「過剰」は、カントが「美的属性 ästhetische Attribute」と呼ぶ副次的な表象を用いるとわかりやすくなる。カントによれば、表現されるべき概念が現実世界には表現することのできない理性理念である場合、概念に直接対応する直観そのものではなく（これを与えることはできない）、表現されるべき概念と結びついた帰結や、その概念と他の概念との関連性を想起させる別の直観を対応させる。これは本来別の概念にあてられるべき直観なのだが、ここで表現されるべき概念を間接的に表示することができ、そのような直観を「美的属性」と呼ぶのである。たとえば、「雷光をかぎ爪を持った鷲」の表象は「天空の王ジュピター」の、「孔雀」の表象は「天空の王女」の美的属性である。鑑賞者が美的属性である直観を眺めることによって「関連する表象の見渡しがたい地平への眺望」<sup>(10)</sup>が心のうちに引き起こされると、これは美的属性が直接的に表す概念の範囲に収まるものではない。これによって「美的理念」は経験の限界を超えたものに到達し、「理性理念」を「描出」しようと試みるのである<sup>(11)</sup>。

さて「美的理念」は「理性理念」を「描出」しようと試みたが、それでは「美的理念」を「描出する」とはいかなることか。カントは同49節後半、天才は本来構想力と悟性の「幸福な関係」のうちに成立すると述べ、「精神」の役割を次のように説明する。

天才は本来、いかなる学問も教えることができず、いかなる勤勉も学び得ることのできない構想力と悟性の幸福な関係性のうちに成立する。〔その関係性のうちで〕

与えられた概念に理念が見いだされ、他方で理念に表現が与えられる。この表現によって、理念によって引き起こされた主観的な心の情調が、ある概念に伴うものとして他者に伝達され得る。後者の才能が本来的には、人が精神と呼ぶものである。というのも、ある表象に際した心の状態のうちにある名づけ難いものを表現し、普遍的に伝達可能にするためには、[中略]ある能力が必要だからである。その能力は、すばやく過ぎ去ってしまう構想力の戯れを捉え、それをある概念(ちょうどこれによってこの概念は独創的であり、同時にどんな原則や実例からも導出され得なかった新しい規則を開示する)のうちに統合させ、その概念は規則に強制されることなく伝達されるのである。[強調はカントによる]<sup>(12)</sup>

この箇所から天才における「精神」の役割とは、美的理念を生み出すことよりも、それを「普遍的に伝達可能にする」ことであることが読み取れる。これは「名づけ難いもの」「すばやく過ぎ去ってしまう構想力の戯れ」と表現された美的理念を、ある1つの概念にまとめることによって可能になり、まさにこのうちに天才の独創性がある。以上の議論をまとめると、天才が表現すべき理性理念の間接的表示となる概念を芸術作品のうちに描き出すことによって、その概念の直観にはとどまらない様々な構想力の表象を鑑賞者の心のうちに想起させ(心を生き生きさせる)、天才の心のうちにある言葉では表せないものを普遍的に伝達することが「美的理念」を「描出する」ということである。

### 3. 1770年代における「精神」概念

本章から、「精神」概念が『判断力批判』以前の未公刊著作<sup>(13)</sup>でどのように扱われているかを時代順に調査し、その変遷を追うことにする。人間学講義録はカントの手によるものではないため信頼性は低いとはいえ、これによってカントにおける「精神」の語と天才概念の内実が大きく変化していることを見て取ることができる。

アカデミー版カント全集に収められている人間学講義録のうち、1772/73年冬学期、1775/76年冬学期の時期において既に Geist の語は「天才」の項で現れ、「生」<sup>(14)</sup>や「生

気づけ」<sup>(15)</sup> といった語との関連性が与えられているが、登場回数は多くない。しかしながら、1777/78年冬学期における講義録、同時期の草稿からこの語が頻出するようになる。カントは1770年代後半から「理念 Idee」に関する思索を深め<sup>(16)</sup>、これと「精神」概念が結びつけられて論じられるのである。Pillauによる講義録において精神は「理念 Idée」による感性の生気づけ」であると定義され、「概念」が単に経験的な事物の抽象によって得られるのに対し、「理念」とは「全体における多様なものの統一」に関係づけられ、「多様なものの原則」を含むという<sup>(17)</sup>。アカデミー版カント全集15巻に収録の「人間学への草稿」にも、編集者により1776～78年と推定される時期には「理念」に関するカントの思索が集中的に残されている。レフレクシオン933番では「精神」が「理念の生成根拠」とされ、「多様な規則の統一には多くの理念が根底におかれている」とされるとともに、作品における多様の統一として「理念」が用いられる。「それによって作品 Produkte がもたらされるところの理念は、〔理念の〕個々の行使としての多産さのうちで無限に進行するため [unendlich weiter in ihrer Fruchtbarkeit geht, als die einzelne Ausübung derselben]、作品は理念によってのみ心を動かす」と述べられるとき、作品の細部に至るまで「理念」が一貫して表現されるべきであるとカントが考えていたことがわかる。したがって、「〔心を〕動かす力は、その理念への関係性を通じて統一を得る作品のうちにある」<sup>(18)</sup>。

さて、この「理念」は天才の創造性とどのようにかかわるのだろうか。上記のPillauの引用の直後、Pillauの講義録には「理念」と「独創性」を結びつける記述がある。これによれば、「精神」とは我々の才能の使用における「新しいものの原理」とみなされるべきであり、これは何かに依拠するものではないため「才能の独創性」と呼ばれる<sup>(19)</sup>。レフレクシオン932番によれば、心の中の生気づけの原理が生気づけるものは「そこから眺望や作品を形成するある普遍的なものに他ならない」ため、「天才は普遍的なものと理想 Ideal を生み出す能力のうち存する」とされる<sup>(20)</sup>。すなわち「精神」は、「感性」を生き生きさせるような普遍的なもの（＝理念）を自ら生み出す能力のうち独創性を発揮すると言える。

ここまでの議論をまとめたい。1770年代前半において既に「精神」は「生気づけの原理」とされていたが、1770年代後半において「全体における多様の統一」であ

る「理念」概念と密接に結びつき、「理念によって感性を生き生きさせる原理」と定義され、このような「理念」を生み出す力のうちに天才の独創性があるとされた。ここから「理念」によって「感性」が「生き生きする」とは、理念の個々の表現を通じてその上位概念である「理念」を見て取る時なのである、と理解することができる。

#### 4. 1780年代における「精神」概念

前章で見た「精神」の役割は多様を統一する「理念」と結びついていることが特徴的であったが、1780年代以降<sup>(21)</sup>「精神」概念との関連においてこのような「理念」に言及されることはなくなる。ここでは「構想力」概念の影響力の強まり<sup>(22)</sup>を受け、「精神」概念は連想主義的なものへと変化する。

Menschenkunde と呼ばれる 1781/82 年冬学期の講義録における「天才」の項の初めにはイギリスの哲学者である A. Gerard (1728-95) への言及があり<sup>(23)</sup>、連想主義的な色彩が最も強くあらわれていると言える。ここでは「精神」は天才における最も本質的なものとされ、「ひと連なりの表象をもたらす」「創造的な能力」とされ<sup>(24)</sup>、構想力 Imagination によって「われわれに様々な新しい像へと眺望を与える様々な未完の理念がもたらされる」<sup>(25)</sup>と述べられる。別の箇所では、「精神」が「そこにおいて他のあらゆる表象が完成をみるところの理念」であるとされ、そのような理念は「産物 Erzeugniß を通して現れ出る」と述べられる<sup>(26)</sup>。この場合、「理念」という語は「多様を統一」する唯一のものではなく、連想された様々な像全体のイメージを意味していると考えることができる。このような「理念」はそれ自体としては「未完」であるが、「様々な新しい像への眺望」を開き「他のあらゆる表象が完成をみる」とき、理念もまた「完成」させられ、これが「産物を通して現れ出る」のである。また Busolt による 1788/89 年冬学期の講義録では、「天才においては、構想力が精神を含んでいる仕方ではなければならない」とされ、「天才は構想力によって取り込まれた表象によって生気づけ、われわれの心の諸力を動かす」<sup>(27)</sup>と述べられる。ここにおいて、「精神」は「構想力」の内部における連想の原理へと変化していることが読み取れる。

ここで注目すべきは、1780年代の講義録において『判断力批判』で見た「(心の



生動性の) 他者への伝達」の問題に言及されることである。Menschenkunde による 1781/82 年冬学期の講義録において、「精神」に際して人は生動的であるだけでなく、かれの「生動性は共感的に他者の生へも伝播する」<sup>(28)</sup> と述べられる。Mrongovius による 1784/85 年の講義録においても、「精神」は「他者にもまた活動への素材を与えるもっとも活動的な心の能力」とされる<sup>(29)</sup>。このことから、「精神」とは構想力の内部における生気づけの原理であるだけでなく、その生動性の伝達の契機を含むことが読み取れる。しかし心の生動性が具体的にどのようにして伝達されるのか説明されることはなく<sup>(30)</sup>、これについては『判断力批判』を待たなければならない。

## 5. 『判断力批判』における「精神」(再)

最後に『判断力批判』における「精神」概念を改めて振り返り、これが「精神」概念発展史の中でどのように位置づけられるか考察したい。もちろん「人間学講義」と批判哲学の枠組みの中にある『判断力批判』を全くニュートラルに比べることはできないが、カントがこれまでの思索をどのように批判哲学のうちに取り入れたのかという観点で本概念の展開を捉え返すことはできるだろう。

「精神」概念発展史という観点において『判断力批判』における最も重要な点は、1780 年代において「精神」が生み出す「理念」＝「構想力の連想イメージの連なり」であったものが「美的理念」としてここで定義され、批判哲学における重要な立ち位置を獲得することである。これは第一に悟性概念との、第二に理性理念との対応関係において捉えることができる。「美的理念」とは一方で「悟性概念に付随する」構想力の過剰な表象であり、この表象は概念の描出に合目的的であるが<sup>(31)</sup>、これに収まらないほど多様な部分表象が付け加えられることにより、その概念の内容以上のものを考えさせる。他方で「美的理念」は経験を超えたものに到達しようとする「理念」であり、その直観が現実に呈示されえない内容過剰な概念である理性理念の「反対物 das Gegenstück (Pendant)」であるとされる<sup>(32)</sup>。ここにおいて「美的理念」とは、もはや単なる構想力の連想によるイメージではなく、(少なくとも試みとして) 理性理念の感性的表示を行う役割を果たす。これに従えば、美的理念を生み出す天才の構想

力も経験法則にのみ従うものであり続けることはできない。『判断力批判』において、構想力は連想の規則に従うと同時に「理性の高次の領域にある規則」にも基づくとされ<sup>(33)</sup>、理性と接近を見せるのである。

1780年代ではじめて現れた「他者への伝達」の契機は、冒頭で確認したように『判断力批判』において「美的属性」（＝別の概念の直観）による美的理念の間接的表示へと結実する。これは同時に悟性概念－美的理念－理性理念の関係性と不可分に結びつき、『判断力批判』第59節における「象徴 Symbol」の議論<sup>(34)</sup>を先取りしている。すなわち「美的属性」は、「図式 Schemata」として概念に直接対応する直観を表示しているのではなく、「象徴」として、美的属性が本来示す概念とは別の概念（すなわち理性理念）の直観を間接的に表示しようとする。この意味で、理性理念に対応する直観である美的理念を間接的に伝達しようとする「精神」は「象徴」の能力であるということができ、カントはこのうちに天才の独創性が存すると考えたのである。

こうした『判断力批判』における「精神」の役割から、カントが自然美だけではなく芸術美もまた道德の象徴となりうることを示そうとしたことが読み取れる。ここにおいて「精神」は1780年代における構想力の連想の原理を下敷きとしながらも、理性理念を「象徴」によって感性化する *Versinnlichung* 能力として、感性界から叡智界への移行を可能にする批判哲学の1つの装置となるのである。

## 6. おわりに

1770年代から1790年の『判断力批判』刊行に至るまで「精神」概念の位置づけ及び「生気づけ」の働きがどのように変化したか、これまでの議論から明らかになったことを再度まとめたい。1770年代では、「精神」は「多様の統一」の根拠である「理念」を生み出し、この「理念」を細部に至るまで統一された作品によって表現することによって心を生気づけるとされた。これに対し1780年代では、「精神」は構想力の連想能力を促進する原理となり、これによって生み出された像を他者へと伝達可能にすることで心を生気づけるとされた。『判断力批判』において「精神」は、理性理念に対応する直観である「美的理念」を、その間接的表示である「象徴」を用いて普遍的に

伝達するとされた。「精神」は1770年代後半においていわば理性に近い役割を果たすのに対し、1780年代においては構想力の連想の機能を促進する原理へと変化するが、『判断力批判』において再び理性との接近を見せる。「精神」には一貫して「心を生气づける」役割が与えられているが、「生气づけ」の仕組みが変化するとともに、「精神」の「天才」概念における位置づけは大きく変化しているのである。

「精神」の「生气づけ」の機能については、従来の研究においても A. Gerard をはじめとするイギリスの哲学者の影響によって1780年代に持ち込まれた「構想力」の連想の概念を用いて説明されてきた<sup>(35)</sup>。しかしながら、本論文は人間学講義録と手稿を丹念に解釈することにより、1770年代後半において、「精神」は「多様の統一」である「理念」によって「心を生气づける」のだとカントが既に考えていたこと、それが1780年代初頭において転回を遂げたことを明らかにした。また、1780年代に現れる「生气づけ」の「他者への伝達」の契機が『判断力批判』において「象徴」の議論に接続し、「理性理念」が再び「生气づけ」の働きと結合することを示した。

「精神」は『判断力批判』だけではなく、講義録や手稿においても「生气づけの原理」として表面上は同じ言葉でくくられている。しかしながら、カントの思考の形跡を辿ることにより、背後にあるその言葉の内実の変遷を見て取ることができるのである。

#### 註

(1) カントによる著作は慣例に従いアカデミー版カント全集の巻数とページ数を記す。『純粹理性批判』からの引用は、第一版をA、第二版をBとして表す。『判断力批判』は *Kritik der Urteilskraft*. Beilage: Erste Einleitung in die Kritik der Urteilskraft. Mit Einleitung und Bibliographie herausgegeben von Heiner F. Klemme. Mit Sachanmerkungen von Piero Giordanetti, Hamburg, Felix Meiner Verlag, 2009 を、『純粹理性批判』は *Kritik der reinen Vernunft*. Nach der ersten und zweiten Originalausgabe herausgegeben von Jens Timmerman. Mit einer Bibliographie von Heiner Klemme. Hamburg, Felix Meiner Verlag, 1998 を、『実用的見地における人間学』は *Anthropologie in pragmatischer Hinsicht*. Herausgegeben von Reinhard Brandt. Hamburg, Felix Meiner Verlag, 2000 を底本とし、和訳はすべて筆者による。

(2) カントは『実用的見地における人間学』において、フランス語においては「精神」と「機



知 Witz」が同一のもの (Esprit) であるとしている。Vgl. VII, 225

(3) V, 313

(4) “ästhetisch” には最も一般的な訳語である「美的」を当てる。

(5) V, 314

(6) カント「天才」概念発展史に関しては 19 世紀末から多くの研究がなされてきたが、とりわけ Schlapp, Otto, *Kants Lehre vom Genie und die Entstehung der Kritik der Urteilskraft*, Göttingen, Vandenhoeck & Ruprecht, 1901. ; Tonelli, Giorgio, “Kant's Early Theory of Genius (1770-1779) : Part I and II ,” *Journal of the History of Philosophy* 4, vol. 2, 1966, pp. 109–131, 209-224.; Giordanetti, Piero, „Das Verhältnis von Genie, Künstler und Wissenschaftler in der Kantischen Philosophie,“ *Kant Studien* 86, vol. 4, 1995, pp. 406-430.; 浜野喬士「カントにおける天才概念の体系的位置づけ」『現代カント研究 14 哲学の体系性』晃洋書房、2018 年、64-85 頁が参考になる。

(7) 本論文はカント内部における「精神」概念の変化を追うことを目的とし、外部の思想家による影響への言及は最小限にとどめる。

(8) V, 314

(9) A51/B75

(10) V, 315

(11) V, 314

(12) V, 317

(13) 「人間学講義録」、「人間学へのレフレクシオン」はアカデミー版カント全集 (*Kant's gesammelte Schriften*. Herausgegeben von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften) 第 15 巻、第 25 巻を底本とし、原文は紙幅の制限上割愛する。

(14) XXV, 366; 436

(15) XXV, 557

(16) Kants Gesammelte Schriften Bd.25, “Einleitung,” p. 39 以降を参照のこと。

(17) XXV, 782 Ostaric はここで *Ideé* の指すものをのちの『純粹理性批判』超越論的弁証論における理念、また『判断力批判』における合目的性に当たるものだとしている。Vgl. Ostaric, Lara, “Works of genius as sensible exhibitions of the idea of the highest good,” *Kant Studien* 101 (1) , 2010, pp. 22-39.: 33

(18) XV, 414

(19) XXV, 783

(20) XV, 414

(21) 1780 年代以降 (Adickes の推定による)、人間学への草稿において「天才」概念、「精神」

概念についての言及はほとんどされなくなる。

(22) Giordanetti は、1781/82 年冬学期の講義録から数学者が天才に含まれなくなる原因を構想力の影響の強まりだとしている。Vgl. Giordanetti 1995: 415

(23) Menschenkunde の講義録において「あるイギリス人ジェラードは、天才について論じ、それについて最良の考察を残した」(XXV, 1055) と述べられる。Gerard による ‚An Essay on Genius‘ (1774) は C. Garve (1742-98) によって 1776 年にドイツ語に翻訳され (»Versuch über das Genie«)、カントもこの書によく通じていたことが知られる。Vgl. Alexander, Gerard, *An Essay on Genius*, 1774, (ed. Bernhard Fabian, München, Wilhelm Fink Verlag, 1966) ; Alexander, Gerard, *Versuch über das Genie*, 1776, (trans. Christian Garve, ed. Heiner F. Klemme & Manfred Kuehn, Bristol, Thoemmes Press, 2001)

(24) XXV, 1061

(25) XXV, 1059

(26) XXV, 1060

(27) XXV, 1494

(28) XXV, 1063

(29) XXV, 1313

(30) Schlapp は「美的理念」が「構想力の表象」である点、それが他者にも伝達可能であると考えられた点を Gerard による影響とみなしている (Schlapp 1901: 342)。

(31) V, 317

(32) V, 314; 342

(33) V, 314; 315

(34) V, 351

(35) Vgl. Schlapp 1901: 337